

## はじめに

この巻には、本研究室のスタッフ/院生による計 7 本の単著・共著の論稿のほかに、以下の 3 本の企画を掲載した。

ひとつ目は、本年 3 月に開催されたテーマセッション「オリンピックと社会正義」の記録である。これは、日本スポーツ社会学会第 25 回大会において、大会実行委員会・一橋大学大学院社会学研究科合同企画として実施されたものである。「オリンピックは社会正義を促すか」というテーマに向かって、本研究室のスタッフである鈴木直文、中村英仁、社会学研究科の町村敬志氏、そして同志社大学の Grace Gonzalez 氏、札幌大学の東原文郎氏の 5 名がそれぞれ報告した後、ディカッションを行なった。2 時間という限られた時間の中にこれだけの内容を詰め込むのは無謀では、とも思ったが、各自のシャープで熱のこもった報告と議論によって、時間内（多少超過したが）に深めるべき広大な問題群が浮かび上がった。関係各位にお礼を申し上げたい。

なお、同学会大会では、もうひとつの合同企画として、カリフォルニア州立大学のアロン・ミラー氏による特別講演「アメリカの大学スポーツ：教育を優先する立場から」を開催した。その記録も本巻に掲載する予定で、テープを起こすか新たに書下ろすか等ミラー氏と議論をし、秋以降に詰めることになっていたのだが、雑事に取り紛れて連絡を怠ってしまい、気がついた時には締め切りを過ぎてしまっていた。ミラー氏およびコーディネーターの労をとってくださった中澤篤史氏にも、ここにお詫び申し上げる次第である。

2 つ目は、早稲田大学の中澤篤史氏が、本研究室のスタッフ時代に院生たちとともに始めた国際的な研究動向の把握を目的とした研究会の活動記録「スポーツ研究の国際動向把握に向けた基礎的検討」である。同研究会は、スポーツ社会学・スポーツ史・スポーツ教育学の領域に焦点化して、社会科学系の国際学術誌 6 誌をピックアップし、創刊号から 2015 年までに掲載された 5,833 本の論文等を蒐集した。今回の研究報告は、それをもとに研究動向を概括したものである。国際的な舞台で活動していくためのまさに基礎的な作業であるといえよう。

3 つ目は、静岡文化芸術大学の溝口紀子氏を招いてのゲスト研究会の記録「柔道の未来選択の位相——ヨーロッパ・フランス柔道から読み解く——」である。この研究会は、本学の言語社会研究科との共同開催となり、そのため普段とは異なる学際的な色彩を帯びることになった。歴史のおよび国際的な広い視野、自らの柔道経験および研究を土台にした濃密な内容を軽快に語ってくださった溝口氏、そして仲介の労をとっていただいた言語社会研究科の小岩信治氏にもこの場をお借りしてお礼申し上げたい。

2016 年 11 月 30 日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 坂上 康博